

# 残そう。歴史を語る古里の歌・唄

会員 田中賢一

## 一、平家踊り【馬島】①

源平合戦一一八〇（治承四）年～一一八五（文治一）年における源氏と平家の政権をめぐる全国的な争乱（治承の乱）。一の谷の戦い↓屋島の戦い↓壇の浦の戦い  
一一八五（文治一）年に平氏一門は滅亡。それら一門の供養をする為に、古く江戸期から盆祭に島民が取り入れたのが平家踊りであり、那須与一を称える口説き唄である。

戦後一時期までは八月一三日、一四日の二日間徹夜で踊っていた時期もあった。

平家踊り（盆踊り）口説き唄

源氏那須与一の一席

積もるおん年 十九歳で

背は小兵で 名は候えど

弓が一手で 矢は一番手

申し給えよ 所は何処

四国讃岐は 屋島の磯で

源氏平家の おん戦いに

数多源氏の大将方は

思い思いの 陣裳飾り

沖に寄せ来る 平家の御座が  
的に扇を 揚げたる次第

あれは源氏の 知恵測るため  
九郎判官 これ御覧じて

継信呼べとの 早使者は立つ  
すぐに継信 御前に出でて

御用如何と 伺いければ

継信沖見よ あれなる舟は

的に扇を 揚げたたる次第

汝一矢で 射落とすなれば

敵にや敗聞 味方にや誉

言えば継信 賢き人よ

上の御用に 叛くじゃないが

一の谷での あの合戦で

駒に敷かれて 二の腕おられ

狙いつけども 矢が届いません

九郎判官 源義経・  
御覧(ごろう)じて

継信 佐藤継信

広いご家中にや 弓取りおれぞ

同じ相弟子 与一がよからう

与一は名取の 名人なるぞ

与一与一と早使者は立つ

平家踊り【馬島】②

すぐに与一は御前に出でて

御用如何と伺いければ

与一沖見よ あれなる舟は

的に扇を 揚げたたる次第

あれは源氏の 腕測るため

あれを一矢で 射落とすなれば

敵にや敗聞 味方にや誉

はいと請け合う 与一の介が

かしこまりたと 御請けを致す

与一その日の 出装束は

褐色茜や 錦を飾り

黒い緘の 大鎧着て

褐色(かちん)

大領肩裾 襟かき合せ

奥州育ちの 栗毛の駒を

小松原より 波打ち際に

静か静かに 歩ませ給う

屋島はその日は大真風にして

見えつ隠れつ 与一の矢先

そこで与一は 賢き人よ

駒を緩めて ひらりと降りて

手水使いて 吾身を清め

西に向かいて 南無明神

東に向かいて 南無八幡と

与一不憫と お思いなれば

あれを一矢で 射落し給え

氣勢かければ やれ有難や

的の扇が 微かに見える

大領肩裾（おおくびか  
たすそ）

大真風（おおまじ） Ⅱ  
南風

五人張りをば 引き絞りつつ

はつと放せば 扇の的の

要どころに むんずと当たる

要なければ 骨散り離れ

折れて離れて 海にと落ちる

陸の源氏は 馬鞍叩く

陸（おか）

沖の平氏は 舟板叩く

那須与一の 誉の次第

## 二、馬島十七夜祭【管絃祭（旧暦六月十七日）】

天馬船を十二人の漕ぎ手（乗組員）が、櫂で漕ぎながら、おかげん船（管絃船）を曳いて馬島港の沖合を何周か廻る。天馬船の漕ぎ手は、漕ぎ唄を船頭（艦權）の音頭で歌いながら漕ぐ。村人たちは波止場に鈴なりになり、村の青年の中から選ばれた漕ぎ手に声援を送る。一方、葛原神社の社紋の入った幕で飾ったおかげん船では、乗手が太鼓を叩き、船首では舞子が右手に御幣を、左手で鈴を振り鳴らし、太鼓に合わせて舞を披露し、神霊を慰

める。見物の村人たちは「エエマイノーエエマイノー」(良  
い舞いであるという褒め言葉)を連呼して盛んに舞子を  
囃す。

十七夜祭伝馬船漕ぎ唄

馬島葛原神社で二隻に乗船する乗組員は、お祓いを受  
けた後、神社前の海岸に繋がれている天馬船に乗り込み、  
いよいよ馬島港沖合に唄を歌いながら漕ぎ出し、十七祭  
本番の海上祭礼に臨む。

- ◎ 船頭(艫櫂⇨音頭取り)が歌う・○漕ぎ手が歌う・◎、
- 繰り返し(適宜)・・・

【後進】離岸⇨漕ぎ手は天馬船左右両舷に前向きに腰掛  
けて漕ぐ

- ◎ エーサーアエーヤ ○ エヤーエーエヤーサーノサー
- ◎ …… ○ ……

【前進】前向きに立つて港外へ漕ぎ出す

- ◎ ヤサホーエイヤー ○ ヤサホーエイヤー ◎ ……
- ……

◎ ホラホーサノサアイヤーホーエイヤ ○ ホラホーサノ  
サアイヤーホーエイヤー

- ◎ …… ○ ……

【前進】港外では漕ぎ手は後ろ向きに両舷に腰掛けて軽  
く漕ぐ

- ◎ ソーオーエイヤ ○ ソーラーエーエヨヤサノサー ◎
- ヨイト ○ サツサノエーエヨヤサノサー ◎ ソーオエイ
- ヤエイヤー ○ ソーラーエーエヨヤサノサー ◎ ……
- ……

【前進】かなり速力を上げ強く漕ぐ

- ◎ チャンリチャンリト儲けた金を ○ オヤマに取られて
- オカマがチャンリ ◎ もひとつチャンリ チャンリチャ
- ンリト儲けた金を ○ オヤマに取られてオカマがチャン

り ◎・・・○・・・

【前進】 最大限の力で漕ぐ（全速力）

◎ヨイトコシヨ ー ○ヨイトコシヨ ー ◎ヨイトコシヨ

ー ○ヨイトコシヨ ー

◎・・・○・・・

### 三、周南市大津島馬島 葛原神社例祭の神楽和歌

葛原神社

宝暦十一年（一七六一）に建立 第一鳥居に銘記

由緒沿革

平安京に遷都された桓武天皇の第三皇子葛原親王によつて、葛の生い茂った丘の上に御鎮座されたという。これによつて、社名を葛原神社と称した。

主祭神 田心姫命・湍津姫命・市杵姫命

主要祭典 二十六夜祭（旧暦一月二十六日）・例大祭（旧

暦九月十二日）

神楽舞奉納

始めの口上（舞い主） 東方に向かつて葛原神社の神を鎮め奉る

東西南北に向かつて各一回唱える。その後それぞれ異なる和歌を詠む。和歌を詠む間は太鼓打ちはやめ、和歌を詠み終えると同時に打ち始め舞が始まる。

奉納和歌

○罪咎を払い清めて畏くも 神の教えを仰ぐ今日かな

○大神の守り給える日の本の 幾万代も栄えゆくらん

○百八十と数はあれども日の本の 大和にまさる国はあらじな

○天津空千道八千道多けれど 中なる道は神のかよい路

○物皆は変わり行くとも秋対島 わが大神の御代はとしえ

○雨あられ雪や氷とへだつれぞ 落れば同じ谷川の水

○うぐいすや梅の小枝で昼寝して 花の散るさま夢にこそみれ

そみれ

これら和歌奉納にもなつて神楽舞の舞い主に対して、観衆（村民）はエエマイノー、エエマイノー（大変良い舞い）を連呼して、舞い主演技に対して褒めのエールをおくる。舞い主を「舞大夫」・「大夫サー」と呼ぶ。

#### 四、戦艦河内【一九一八年七月二日一五時五七分徳

##### 山湾で謎の爆沈】

一九一二年（明治四五）年竣工、排水量二万八百トン、速力二〇ノット

装備Ⅱ主砲五〇口径三〇・五センチ連装砲二門、副砲四五口径三〇・五センチ連装砲四門、一五センチ単装砲一〇門、一二センチ単装砲八門、七・五センチ単装砲一六門、四五センチ水雷発射管五門

初の国産最新鋭戦艦、連合艦隊第一艦隊旗艦、乗員一〇二〇名、殉難者六二一名

この歌は毎年七月一二日の慰霊祭で、参列者により斉唱されている。

噫！河内艦（昭和五〇年代に筆者が再発掘テープ化）

一、波のまにまに 浜千鳥

誰か哀れを 告ぐるらん

時は 大正七年の

暑さ きびしき七月の

二、忘れも すまじ十二日

暮方 四時を報ずころ

周防徳山 沖合で

袖をしぼる 大惨事

三、いかなる天魔の たわむれか

御神は何処に おわすらん

我が 日の本の 守り艦

その名も高き 河内艦

四、にわかに 起こる大音響

艦長 正木鬼大佐

作詞・作曲者 不詳

多くの部下と諸共に

甲板上に 馳せたれど

五、早や艦体は 傾きて

いかに防がん 術もなし

乗組員の 益良夫が

必死となりて 防げども

六、夢見る如き早わざに

戦闘一の 巨艦も

次第次第に沈み行き

姿も消ゆる 悲しさよ

七、ああ艦長 大佐殿

退艦命令 下せども

頼りとたのむボートさえ

綱は切れて 影もなし

八、いと勇敢に 働ける

将卒諸子の 益良夫

はや是までと 覚悟して

東の方を 拝しつつ

九、中には哀れな 武夫は

己が室にと 帰り来て

ドアを固く 締め切りて

艦と運命を 共にせり

十、ああ遺憾なる 出来事や

無念の涙と 諸共に

死傷は 六百有余人

恨みは深し 海の底

五、大津島防空砲台【大戦中に旧徳山市大津島笹尾大津

山標高一八六メートルに設置】

徳山要港防備のために徳山警備隊が配備され、大戦前

から徳山周辺は一大海軍の要塞化がすめられた。その一翼を担ったのがこの砲台で、一二・七センチ連装高角砲二基と、一三ミリ単装機銃一基の装備と、兵員五四名で徳山警備隊大津島防空砲台の任務を遂行したが戦果なし。

この歌は当時の砲台員の真情を綴ったもので、毎年建国記念日の式典が砲台跡で挙行され、その際に島民により斉唱された（筆者は二度の徳山空襲を対岸の馬島で体験）。

ああ大津島砲台〔平成六年作詞〕 作詞 田中賢一

作曲 吉永雅弘

一、眼下に展ける 周防灘 〔陸自第十三師団音楽隊長〕  
瀬戸内海の彼方に 佐多岬 〔瀬戸内海Ⅱせと〕

鼓海の波は 穏やかに  
徳山守る 防空砲

二、日夜の猛訓 腕が鳴る

我らが頼る 砲整備

三基の砲が 大空を  
自信みなぎる 我が砲手  
〔砲Ⅱつつ〕

三、夜襲に備え 眼光は  
闇おも透す 千里眼

豊後水道 上空に  
天空覆う 敵機影

四、空襲警報 発令下

戦闘配備 抜かりなく

探照灯に 敵機怯え

照準合わせ 唸る砲  
〔砲Ⅱつつ〕

五、轟音炸裂 弾丸あられ  
〔弾丸Ⅱたま〕

幾百幾千 空に散る

届かぬ弾丸の 砲煙に  
悔し涙が 頬濡らす  
〔弾丸Ⅱたま〕



六、燃料廠や 市街地は

焼夷弾の 洗礼に

昼かと紛う 天を焼く

ああこの無念 大津島砲台 (大津島砲台 〓 おおづ

しま)

ああこの無念 大津島砲台

れなくなつた。

亥の子祭の唄 (亥の子石搗き唄)

亥の子 亥の子

亥の子餅をついて 祝わん者は

鬼を産め 蛇を産め 角の生えた子を産め

これの (この家の) お米は良いお米

ひと株刈れば二千石 二株刈れば四千石

お酒に造れば いつもの酒々

御座つたー御座つたー亥の子様が御座つた

行事であつた。

それと、この祝いは、稲の刈り上げ祭 (収穫祭) の一

つともされ、五穀豊穣に感謝し田んぼの神様が去つて行

く日と信じられた。村の子供達は「亥の子石」をカズラ

で縛りそれに何本かの振り緒を付け、村の家々を廻り、

唄を歌いながら庭先の土を打つて、餅や祝儀をもらつた

古くからの伝統行事であつたが、残念ながら今では見ら

一にや 俵をふんまえて

二にや につこり笑ろうて

三で 酒を造つて

四つ 世の中良いように

五つ いつもの如くなり

六つ 無病息災に

七つ 何事無いように

八つ 屋敷を広めて

九つ ここに蔵を建て

十で とつくり納めた

### 七、大津島人間魚雷回天特別攻撃隊（必死零生兵器）

太平洋戦争末期、戦局の劣勢を挽回するため、人間が操縦する爆装した特攻兵器人間魚雷回天で、敵艦船等に体当たり攻撃を敢行する特別攻撃隊が編成され、大津島

基地では、昭和一九年九月より徳山湾、周防灘海域で厳しい訓練が開始された。

昭和一九年一月八日から終戦までに太平洋諸海域で作戦に従事し、大津島基地だけでも、搭乗員・整備員合わせて八〇名にもなる戦死者を出している。しかも、平均年齢は約二一歳という若者であった。筆者は訓練、出撃状況を国民学校一年時前後に具に目撃体験した。

この歌は、昭和四〇年代に、下松市在住の一市民が作詞して、大手レコード会社によって発売され、大ヒットした哀調のメロディーによる名歌である。

あゝ 回天

一、小山のうねり ぐだけて返る

征かば還らぬ 特攻隊

十九や二十の 若人が

港、徳山 大津島

あゝ回天の 基地なるか

作詞 山門芳馨

作編曲 長津義司

二、貴様と俺は 同志の桜

涙浮かべて 歌いしも

二度と逢えない 戦友に

別れを告げて 勇み立ち

あ、回天は 出でて征く

三、遺書を残して 形身を置いて

今日は征くぞと 肩を抱き

白の鉢巻き 白だすき

呼べど 呼べども あ、回天

あ、回天は 還らない

あ、回天は 還らない

歌詞資料  
テイチク株式会社